東方學報 京都第 94 册（2019）：582-565 頁

沙　　丘

淺　原　達　郎

沙丘についてなにか書きたいと，いつのころからか思っていた。秦の始皇帝と趙の武靈王とがそこで死に，また殷の紂王の宴會場でもあったと傳えられる場所に，興味を引かれたひとは，もちろんわたしだけではなかったろう。遲まきながら氣づいたのだが，大川裕子氏に「黄河下流域における沙地利用の歴史的變遷」という論文があり，その「二、古代における沙地の記載」のなかで，沙丘をふくめて，詳細な考察がなされている。この論文は，鶴間和幸編『黄河下流域の歴史と環境－東アジア海文明への道』（學習院大學東洋文化研究叢書，2007 年 2 月，東方書店）のなかの一篇であり，大川裕子氏の『中國古代の水利と地域開發』（汲古叢書 127，2015 年 6 月，汲古書院）にも第三章として「―― 祭祀の場から落花生導入まで ――」の副題つきで採錄されている。りっぱな研究であって，すなおに敬意をおぼえるのだが，どうもわたしのいだいていた沙丘のイメージとはちがうようで，なにか書きたいという氣持ちがますますつのる。とはいえわたしのイメージも，たしかな根據があるわけでもなく，できれば小說として書けたらおもしろいと思うくらいなのだが，悲しいことにそこまでの文才がない。不本意ながら，論文ともなんとも似つかぬものを，ここにしたためてみたしだいである。

秦の始皇帝の三十七年，始皇は最後の天下巡行の旅に出る。雲夢から會稽，琅邪，之罘と巡って，歸途につき，平原の渡しで黄河を渡るときに病氣になる。そして七月，丙寅の日，沙丘の平臺で死を迎えたと，史記・秦始皇本紀に記す。そこから有名な趙高と李斯のたくらみ，いわゆる「沙丘之謀」（史記・李斯列傳）が始まるのだが，それはさておき，いまこの始皇のなくなった場所，沙丘の平臺とはどういうところなのだろうか。一見，旅の通過點に過ぎないようで，たしかにそうかもしれないのだが，この沙丘，いろいろといわくのあるところである。史記の集解は，徐廣を引いて，趙に沙丘宮があって，それは鉅鹿にあり，武靈王の死んだところである，という。趙の武靈王と秦の始皇帝と，死んだ場所が同じなのである。

武靈王の死も有名な事件である。趙の武靈王は位を子の惠王に讓ったあと，主父と稱

して，氣ままな餘生を送っていた。ところが，沙丘で，惠王とともに遊んでいたとき，公子章と田不禮の反亂が起こる。公子章は惠王の異母兄で，やはり主父の子である。このとき，主父と惠王は別の場所にいたらしく，公子章らは主父の命をいつわって惠王を呼び出そうとするが，失敗。反亂は公子成と李兌によって鎭壓され，公子章は沙丘の主父のところに逃げ込む。主父は公子章をかくまったのだが，公子成と李兌はこれを包圍する。公子章が死んだあとも，公子成と李兌は，いまさらあとには引けないと包圍を續けた。出て來ないと皆殺しだと警告されるが，主父だけは出るに出られず，そのうえ食べ物もなく，すずめのひなを取って食べたりしたが，三個月あまりで主父は餓死したと，史記・趙世家にいう。これがいわゆる「沙丘之亂」（史記・樂毅列傳）である。韓非はこの事件によほど思うところがあったとみえて，しばしば言及する（韓非子・姦劫弑臣，備內，難一）。

沙丘についてもうひとつだれでも知っているのが，殷の紂王の酒池肉林の話である。いまさら紹介するまでもないが，紂王は，沙丘の庭園と建物を增築し，野獸や飛鳥をたくさん取ってきて放し飼いにし，鬼神をあなどり，樂隊や劇團を沙丘に集めて，酒の池をつくり，肉をぶらさげて林とし，裸の男女をそのなかで追いかけさせ，夜遲くまで飲み明かしたと，これは史記・殷本紀にある。

このみっつのエピソードが同じひとつの沙丘を舞臺としていることに氣づいているひとは古來少なくないのだが，紂王の宴會場である沙丘が，始皇帝や武靈王の死んだ沙丘と同じ場所であるとは，われわれの知っている殷末期の情況からすると，にわかには信じがたい。しかし，漢書・地理志によると，鉅鹿郡の鉅鹿縣の北に，禹貢の大陸澤があり，東北七十里には，紂が作った沙丘臺があるという。また，水經注卷十・濁漳水によると，衡漳水が沙丘臺の東を流れており，その沙丘臺は紂が作ったもので，巨鹿故城の東北七十里にあり，趙の武靈王と秦の始皇はふたりともここで死んだのだ，という。かりに紂王が離宮を營んだとしても，殷最末期の勢力範圍からすると，鉅鹿郡では北に離れ過ぎていると思うのだが，古くからそういう傳承があったことはまちがいないだろう。

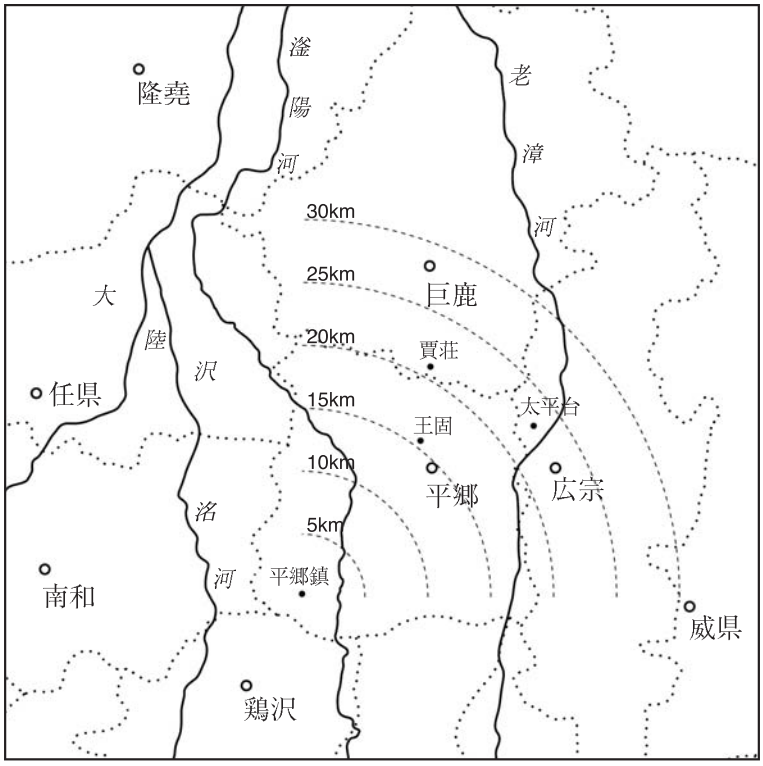
史記・貨殖列傳に各地の風俗を記すところによると，このあたりは當時なお沙丘の紂の淫地の餘民がいたらしい。かれらの氣風はせっかちで，投機に依存した生活をしている。男は，集まっては遊びまわり，悲壯に唱って激情を表わし，ひと旗あげては集團で盜賊になり，ひと休みしては墓掘りをしたりあやしげな商賣に走ったり，見た目のよいやつも多くて，役者になったりもする。女は，樂器をかきならし，ぞうりでちゃらちゃら，上流階級に媚びてまわって，後宮に入るものがどこの國にもいる，という。するとあるいは，じつは話が逆で，沙丘當地のそういう風俗がまずあって，紂の遺風と解釋されたのかもしれない。上海博物館藏戰國竹書の容成氏では，紂の亂行を記すなかに，酒

で池をつくり，たらふく飲んで樂しんだという一條がある。酒池はあっても肉林はなく，場所も明言しないので，必ずしも沙丘の離宮という設定ではないのかもしれないが，そもそも容成氏の記述は時代考證を無視したところがあって，この酒池の前後に記されるのも，銅の足かせを作ったというのと，博奕（ボードゲーム）にいそしんだというのとで，およそ殷の實錄として讀ませるつもりがあるとは思えない。そうしてみると酒池肉林は，戰國時代の感覺で考え出された亂行のうえに，沙丘あたりの現實が重ねられて，そこに多少の誇張というか願望が加わったものなのであろうか。だから本來，遠いむかしの亂君の話ではなくて，戰國時代のひとびとにとっては，それほど非現實な話題ではなかったのかもしれない。すると案外，主父の遊びぶりこそがそのモデルであった，などということもありうるだろう。

だから，まず推測できるのは，沙丘がたいへん樂しそうなところだということである。水經注で沙丘の東を流れるとされる衡漳水は，このあたりでは譚其驤氏のいう禹貢河にあたる。譚氏によれば，當時の黃河は，下流で禹貢河と漢志河というふたすじの流れとなって，華北平原を拔け，渤海に注いでいた。譚其驤「西漢以前的黃河下游河道」（『歷史地理』創刊號，1981 年 11 月，また譚其驤主編『黃河史論叢』，復旦大學出版社，1986 年 10 月，『長水集』下册，人民出版社，1987 年 7 月）に考證がある。沙丘は禹貢河の西側にあって，そのさらに西には鉅鹿澤がある。だから沙丘は，黃河（禹貢河）の運んできた土砂と，太行山東麓から流れる諸川が運んできた土砂が堆積してできた，河畔砂丘か自然堤防的な地形なのではあろう。太行山東麓の諸川は，水位の高い黃河と，さらには堆積した土砂に阻まれて，巨大な游水池を形成した。それが鉅鹿澤，つまり禹貢の大陸澤なのだとみなされる。沙丘の上にさらに高臺建築を築けば，東は黃河，西は鉅鹿澤が一望され，絕景であったろう。沙丘といっても，一面の砂ではなく，おそらく植生はゆたかで，鉅鹿澤を中心に野獸飛鳥のたぐいは生息していたであろうから，狩獵などの遊戲を樂しむことができよう。さらに紂王にならって，どこかから珍奇な動物を集めて來ることもできたであろうか。そのうえ一帶の住民も，自由奔放，感情豐かな氣風で，藝達者な美男美女が多いとなると，遊興の地としてうってつけである。そのむかし紂王もここでこうして遊びましたと言えば，さらに盛り上がるだろう。勝手な想像だが，當地の劇團の出し物に，酒池肉林の一幕があったとしたらおもしろい。

ただ，その沙丘の場所を確定することがむずかしい。禹貢河，あるいは水經注の衡漳水は，だいたいいま老漳河と呼ばれる流れにあたると考えられる。いまの行政區畫でいうと，廣宗縣と平鄉縣の縣境を北流して，廣宗縣の西部をかすめ，巨鹿縣に入る。廣宗縣西部には，老漳河の西岸に，大平臺という村があって，その南に沙丘平臺の遺跡がある。もともと東西 150 m，南北 70 m，高 3 m の臺地であったという（『廣宗縣志』，1999 年

9月，pp. 554-555)。大川氏もここを訪れられたようである。『中國歴史地圖集』はここを「沙丘」「沙丘臺」とする（譚其驤主編，地圖出版社，第一册，p. 38，第二册，p. 26)。このほか平鄉縣の北に王固という村があり，そこにも沙丘平臺の遺跡があるらしい（『平鄉縣志』，1999年12月，p. 702)。ふたつの縣で沙丘の取り合いになりそうないきおいだが，そもそも史書に記すところをみるに，沙丘の位置に微妙にずれがある。まず，すでに見たように，漢書・地理志では，鉅鹿縣の東北七十里に沙丘があるという。水經注もこれを承けている。ところが，史記・殷本紀・正義に引く括地志は，沙丘臺が平鄉の東北二十里にあるという。元和郡縣圖志卷十五・邢州も同じである。唐の平鄉縣が漢の鉅鹿縣にあたることは元和郡縣圖志で確認できるから，起點は變わらないのに，東北七十里から二十里にまで近づいているわけである。明一統志卷四・順德府に，沙丘臺が平鄉縣東北二十里にあるというのは，括地志などを承けるのだろうが，そのほかに，平臺が平鄉縣東北三十里の太平鄉にあるともいう。はてこんどは三十里になった。さらに，清一統志卷二十・順德府では，「舊志」を引いて，いま平鄉縣東北に王固岡があり，岡の東北十餘里に大平臺村があり，東に廣宗鄉を去ること八里，その東にさらに小平臺村があって，そこが沙丘臺の遺地なのだという。王固岡は，平鄉縣志が沙丘平臺だと言っている王固村であろ



圖一

うが，そこから廣宗縣志が沙丘平臺だと言っている大平臺村まで 9 km ほどで，二十里くらいはありそうだが，これが「十餘里」の誤差のうちと思えば，いまの大平臺村が清一統志の大平臺村であろう。なお，廣宗縣から大平臺村へは西北に 4 km くらいで，方角はともかく，「八里」には合う。つまり，いまの廣宗縣大平臺村が沙丘平臺だとする記述は，清一統志にさかのぼるのである。明清の平鄕縣治はいまの平鄕鎭であるが，大平臺村は，平鄕鎭から東北に 23 km ほどのところで，五十數里とみられるから，また距離がちがう。たぶん距離を合わせたのではなく，そこにたまたま「平臺」の名があることが判定の根據なのだろう。明一統志のいう平鄕縣東北三十里の太平鄕は，いまどこにあたるのかわからない。王固村は，平鄕鎭からは 16 km ほどあって，三十里というにはすこし遠すぎるが，あるいはこれが，ここを沙丘平臺とする說の根據になっているのだろうか。括地志などの平鄕縣東北二十里となると，どこにも適當な場所が見つからないが，平鄕縣內を出ないことはたしかである。いや，そんなものはすべて無視して，もっとも古い漢志の說に賴ればいいではないかと思うのがまともな發想だと思うが，平鄕鎭から東北七十里あたりとなると，28 km ほどのところに，いまの巨鹿縣がある。本來ならばそのあたりを探さなければならないのだと思われる。

大川氏は，いま廣宗縣城の東に帶狀に廣がる沙地に注目して，黃河の舊河道とかかわる可能性をみておられる。『廣宗縣志』はこれを「沙丘」と呼ぶ（p. 102）。ただし，この沙地帶は老漳河の東にあって，南は威縣の方に延びて，老漳河からは離れる傾向にある。また北にも延びているようで，老漳河を越えた延長線上のいま巨鹿縣境內にも見られて，縣城から南の賈莊にかけて分布するという（『巨鹿縣志』，1994 年 5 月，p. 48）。ここが沙丘ならば，老漳河の西，大陸澤の東にあって，位置關係はあうのだが，しかしこれは，宋の大觀二年（1108 年）に鉅鹿縣城を直擊した氾濫によるものだろう。このとき鉅鹿全縣で 3 m から 4 m の土砂が堆積したという。廣宗縣境內の沙地帶も，おそらく宋の元符二年（1099 年）の決潰に始まる北流の一派ではなかろうか。北宋時代のいわゆる「北流」については，鄒逸麟氏の「宋代黃河下游橫隴北流諸道考」（『文史』第 12 輯，1981 年 9 月，また『黃河史論叢』）に詳しく，その「內黃北流」がほぼこの沙地帶に一致する。

土砂に埋もれた鉅鹿縣であるが，やはり元和郡縣圖志卷十五・邢州によると，ここは漢の南緣縣であったが，隋の時代に鉅鹿縣を置いたという。明清の一統志によれば，南緣縣故城は鉅鹿縣の北にあるということで，『中國歷史地圖集』（第二册，p. 26，p. 48）は，現巨鹿縣のこころもち北に南緣縣を置く。漢志に言うところの鉅鹿の東北七十里にもっとも合致するのは，この南緣縣の位置なのである。南緣縣が沙丘そのものではないにしても，沙丘に近接することから，ここに縣を置く理由が生じたのではあるまいか。なお，水經注はなぜか南緣縣の所在に言及しない。なにか言ってくれると沙丘との位置關係が

わかってありがたいのであるが。ともかくそういうことで，ここでは，いまの巨鹿縣あたりに沙丘があって，禹貢河と鉅鹿澤に挾まれていたと想定してみよう。宋代に押し寄せた土砂に深く埋もれて，景觀は一變してしまったであろうから，現狀から當時のありさまをしのぶことはできない。沙丘平臺の位置が失われたのはそのためであろうか。巨鹿縣の被災のさまは，やはり鄒逸麟氏の「歷史時期華北大平原湖沼變遷述略」（『歷史地理』第5輯，1987年9月，p.32），「黃河下游河道變遷及其影響概述」（『復旦學報』歷史地理專輯，1980年，いま『黃河史論叢』，p.235）に簡單な言及がある。

さて，公子成や李兌がただ包圍するだけで，中に踏み込まなかったのはなぜなのだろうか。最終的にかれらのやったことを考えると，主父に對して遠慮があったとは思えない。だから，踏み込みたくとも踏み込めなかった理由があるのだろう。考えられるのは，ひとつにはやはり自然環境であって，まず周圍よりも高くなっているうえ，しかも周邊は池や川で圍まれている。そこがまた沼地のジャングルのようになっていたら，近づくことさえむずかしいだろう。そうなると，公子成たちとしての最善の策は，そこを遠卷きに圍んで糧道を絕つことだったのではなかろうか。沙丘の弱點は，食糧の補給にある。史記では，三個月あまりで主父が餓死したというが，おそらくかれらは主父がどうなったかを確認するすべを持たなかったのではないか。それができるくらいならとっとと踏み込めるだろう。三個月あまりたったところで，さすがにもう生きてはいないだろうと判斷して，包圍を解き，死亡認定をして諸國に告知したのである。さらに，踏み込めなかった理由としてもうひとつ考えてみたいのは，周邊住民のことである。さきにみた貨殖列傳の記述からすると，このあたりの住民は，從順なおとなしい性格とはいえなさそうである。そのようなかれらが沼澤地に根を張っているのだから，さながら梁山泊をかかえているようなものである。不用意に荒っぽい行動に出ることを避けたのかもしれない。こうして沙丘は，外から閉じた祕境のような世界となりやすいところがあって，趙高らの陰謀にも好條件を提供したのではあるまいか。「沙丘之謀」ということばには，祕められた密室のひびきが，當時においてあったと思ってもよいのである。

戰國時代の黃河下流の大藪澤地としては，黃河の北には鉅鹿澤，南には鉅野澤がある。當時の鉅鹿澤の範圍がどれほどであったかはわからない。いまでは任縣境內に，大陸澤の痕跡を殘すのみとなっているが，時代をさかのぼるほど，規模は大きかったものと推定される。地理的な環境をおおまかに整理すると，太行山の東に黃河（禹貢河）が南から北に流れ，黃河に向って西から東に流れる河川としては，山西に源を發し太行山を突っ切って流れる大河川が，南に漳河，北に滹沱河とある。漳河と滹沱河の間には，太行山東麓に源を發するもろもろの小河川，たとえば浸水や泜水がある。これらが鉅鹿澤の主たる水源であったとすると，おおざっぱにいえば，南には邯鄲に都する趙，北には靈壽

を都とする中山の，その二國に挾まれた中間に廣がっていたものと思われる。この鉅鹿澤から生まれるいわゆる山林藪澤の利は，趙および中山の兩國の立地としてたいへん貴重なもので，中山のような小國が成り立ったのも，南に鉅鹿澤をかかえていたからではなかろうか。だから趙の武靈王が中山を滅ぼしたのは，鉅鹿澤の資源を獨占することが目的のひとつであったろう。沙丘一帶の住民もひとまず趙の支配に入らずをえず，それで主父親子も沙丘でのんびり遊ぶことができたのである。

禹貢では，「鉅野」が「大野」であり，「鉅鹿」は「大陸」である。そこでわたしなどは，「鹿」は「陸」なのかと短絡的に思ってしまうのだが，上古音では「鹿」は覺部，「陸」は屋部である。さて，漢書・地理志の「鉅鹿」の「鹿」について，應劭が「林之大者也。」と注するのは，その風俗通義・山澤「麓，林屬於山者也。」の「麓」として解釋しているのだろう。これは春秋經・僖公十四年「沙鹿崩。」の穀梁傳「林屬於山爲鹿。」に據るものである。風俗通義にも言うように，この「麓」は，書經・今本舜典「納於大麓，烈風雷雨弗迷。」の「麓」でもある。堯が舜の能力を試すために，舜を「大麓」に放り込んだが，悪天候にもかかわらずそのなかで道に迷わなかったというところである。これらの「麓」は必ずしも通常の「山足」を指す「麓」ではないとみなされる。史記・五帝本紀は「堯使舜入山林川澤，暴風雷雨，舜行不迷。」と，「大麓」を「山林川澤」に言い換える。春秋左氏傳・定公元年に魏舒が「大陸」で狩りをしたというときの「大陸」は，場所として禹貢の「大陸」ではないというのが通説で，それはもっともなのだが，この「大陸」も，特定の場所を示すのではなく，舜典の「大麓」と同様に，要するに一般に「山林川澤」にあたると思ってしまえばわかりやすい。すると，「大麓」も「大陸」も同じようなものだと考えることが可能で，つまりは，覺部の「麓」と屋部の「陸」が事實上通じているとみていいのだろう。

「麓」と「陸」が同じものだとして，その正確な定義を明らかにしないが，應劭の解釋を參考にすれば，沼澤地のなかに小山があって，そこに木が茂っている，という風景を思い浮かべたら，それほど見當はずれではあるまい。史念海氏「戰國至唐初太行山東經濟地區的發展」は，これを根據に，鉅鹿澤周邊に，その名のごとく規模廣大な森林があったと推論し，その「戰國秦漢時期太行山東形勢圖」では湖のまわりに森林を描いている（『河山集』，1963 年 5 月，生活・讀書・新知三聯書店，p. 140，p. 145）。「鉅鹿」は，南の「鉅野」に比べて，この「麓」「陸」があるのが特徴なのだろう。つまり沼澤地のなかに高さをもった臺地がかなり存在し，樹木が生い茂っていたのだと思われる。沙丘の植生がゆたかだったのではないかとみたのは，ここからの類推である。

鉅鹿が歴史上に名を殘すこととなるのは，これもたいへん有名な鉅鹿の戰いの舞臺としてである。二世皇帝の三年のこと，秦の章邯が趙王歇らを邯鄲に攻め，趙王と張耳は

鉅鹿に逃げ込む。ここで，規模はまったくちがうが，沙丘と同様の事態が起こる。秦軍は鉅鹿に攻め入ることはせず，王離と涉閒のふたりに命じて鉅鹿を包圍させる。兵糧攻めのつもりだったのだろう。悠長にしている餘裕が秦軍にあったとは思えないが，ほかに方法はなかったのだろう。つまり，鉅鹿もまた沙丘のように，容易に踏み込めない環境にあって，ただ弱點は糧道を絶たれるといかんともしがたいところにあった。ただし，包圍するがわにも同じ弱點が生まれる。章邯は，南の棘原というところに陣を敷き，そこから甬道つまり抜け道を通して黄河までつなぎ，包圍軍に食糧を送った（史記・張耳陳餘列傳）。黄河までということは，包圍軍も水邊にいて，水運を使うのであろうか。包圍軍は食糧を得て，急いで攻めたが，すぐには鉅鹿は落ちない。ただ趙王たちも食糧が盡き，危機的な情況である。だから章邯のとった作戰は基本的に正しいのだと思われる。陳餘は援軍を集めて鉅鹿の北に陣取ったが，秦軍を畏れて手を出せない。そこに現れたのが項羽の楚軍である。項羽はまずあちこちで甬道を破壞して，包圍軍の糧道を絶った。そのうえで南の章邯軍を破り，鉅鹿の包圍を解いたのである。

鉅鹿の戰いにおける地理については，いくつかわからないところがある。根本は「河」つまり黄河が，どの河川を指すのかということである。鉅鹿の諸軍が「河北之軍」と呼ばれ，また項羽たちが鉅鹿を攻めるにあたっては，「河」を渡ることが條件になっている。當時禹貢河が存在したならば，もっとも近くにある禹貢河が「河」だと考えたくなる。譚其驤氏は當初そう考えたらしい。しかし「西漢以前的黄河下游河道」では，この場合は漳河が「河」と呼ばれているとみなした。譚氏は明言こそされていないが，項羽たちがそのまえに集結した「安陽」が，つまりいまの安陽だとすると，すでに禹貢河を渡っていることになるのを考慮されたのではないかと思う。これに對して，辛德勇氏の「巨鹿之戰地理新解」（『歷史地理』第14輯，1998年8月）は，「河」を漢志河と考える。しかし，まず「安陽」の位置に困るし，なにより，いざ「河」を渡って決戰だというとき，遠く漢志河を渡っているようでは，迫力が出ないだろう。戰後に項羽と章邯が殷虚で盟約を結ぶところからしても，いまの安陽が據點であったと考えるのがもっとも通りがよい。そうなると「河」をどう考えたらよいのか，正直言ってよくわからない。ともかくこのとき鉅鹿の秦軍は，一時的にいわば死地にあったのであり，秦軍に勝つとしたらこのときをおいてほかにないことを，楚軍のだれか，おそらくは范增が，見拔いていたのだろう。

さて，ここで視點を變えてみる。春秋經・僖公十四年「沙鹿崩」の「沙鹿」はどこにあるのだろうか。「沙丘」と「鉅鹿」を合成したような地名である。杜預の注によれば，沙鹿は山名で，平陽郡元城縣東に沙鹿土山があるという。漢書・元后傳によると，元城

縣の長老が，元城の郭の東に五鹿の虚があり，それが沙鹿の地だ，と言っている。漢の元城縣は魏郡にあり，晉では陽平郡に屬す。杜注の平陽は陽平の誤りである。續漢書・郡國志によると，そこに沙亭なるところもあるらしい。これは，春秋經・定公七年「齊侯衞侯盟于沙。」の杜預注「陽平元城縣東南有沙亭。」にいう沙亭である。水經注卷五・河水によると，黄河の故道が，元城縣故城の西北を通り，沙丘堰に至るという。黄河の故道とは，ここでは譚其驤氏のいう漢志河である。禹貢河と漢志河の關係はあとでまた考えるが，沙鹿は，漢志河の東岸に存在した，沙丘と同種の高地なのであろう。また，「鹿」であるからには，鉅鹿と同様に山林を思い浮かべてもよいのだろう。

沙鹿は五鹿でもあると，漢書などは言うのだが，五鹿もいろいろと傳說のある地名である。まず，春秋左氏傳・僖公二十三年に，晉の文公重耳の諸國放浪を述べるなかに，五鹿が出てくる。これも有名な話で，衞の國を出て，五鹿にいたったところで，重耳は野人に食べ物を求めたが，野人は土塊を與えた。重耳は怒って野人をむち打とうとしたが，子犯は，天からの授かり物だからおじぎして頭に載せなさい，と言ったという。また，僖公二十八年には，文公の報復を述べるなかに，五鹿を取ったことをいう。放浪中の重耳はそのあと齊に行くから，五鹿は，衞から齊にいたる途上になければならない。清華大學所藏戰國竹書の繫年では，第六章に文公の諸國放浪が記されて，そこに五鹿は出てこない。五鹿は諸國とは別のあつかいなのであろう。しかし，第七章の報復戰では，曹と五鹿を包圍したことになっている。また同じく清華大學所藏戰國竹書の晉文公入於晉では，曹と五鹿に克ったことになっている。五鹿が曹と同列にあつかわれているのである。すると，竹書の五鹿も，位置關係としては左傳の五鹿と同様に考えていいのだろう。杜預の注は，五鹿は衞地で，いま衞縣西北に五鹿という名の地があるが，陽平元城縣の東にも五鹿がある，と二說を竝記する。陽平元城縣の東とは，つまり沙鹿である。衞縣西北の五鹿は，水經注では，さきほどの黄河の故道の記述よりすこしあとの，浮水の故道をたどるところで出てきて，浮水の故道が黄河の故道を横切ったところで五鹿の野を通過する，という。黄河の故道に沿って言えば，やはりその東岸で，沙鹿のすこし南，つまり上流にあたる。楊伯峻氏（『春秋左傳注』，1981 年 3 月，中華書局，p. 406）は五鹿にふたつあるとして，いまの大名縣東と濮陽縣南というが，大名縣東が杜預の言う元城縣東であるのはよいとして，濮陽縣南は，衞縣西北にあてるには南に寄りすぎる。いまの清豐縣西北あたりとみるべきで，『中國歷史地圖集』（第一册，p. 25）の置く位置が正しい。五鹿は，左傳ではのちに，襄公二十五年，哀公元年，哀公四年に，晉，衞，齊の係爭地として出てくる。杜預は，哀公元年と四年の五鹿について，晉の邑と言い，それまでの衞の五鹿とは區別しようとしている。ただし，晉の五鹿の位置についてはなにも言わない。楊伯峻氏は，この區別をふたつの五鹿にわりあて，晉の五鹿が大名縣東つまり

元城縣東の五鹿，衞の五鹿が濮陽縣南，つまり正しくは衞縣西北の五鹿であると，分けて考える（『春秋左傳注』，p. 1102，p. 1607，p. 1628）。しかし，僖公二十八年には晉が五鹿を取ったことになっているのだから，單純に衞の五鹿か晉の五鹿かというだけで區別するのもどうかと思われる。しかも兩地それほど離れておらず，南北 50 km 足らずのうちにある。おそらくこのあたりの黄河（漢志河）の東に，鉅鹿の沙丘と同じような高地が，廣範圍にわたってあり，それを沙鹿と言ったり五鹿と言ったりしたのではあるまいか。沙鹿や五鹿の「鹿」はもちろん鉅鹿の「鹿」と同じく「麓」で，小高い丘を指すのだろう。僖公二十三年の五鹿，つまり重耳が衞から齊に行く途上の五鹿は，ここであろう。襄公二十五年では，晉から魏舒と宛沒が派遣され，衞の獻公を歸國させるべく，亡命先の齊に迎えに來たのだが，齊の崔杼は，獻公の家族を留めて，ひきかえに五鹿を要求したという。杜預はこれは衞の五鹿だというのだが，情況からみて，要求されているのが衞の五鹿であって晉の五鹿でないとはいえない。ただしこの五鹿も，場所としては，衞から齊に行く途上の，同じ五鹿であろう。なお，いま，大名縣東や清豐縣西北には沙丘が見られるが（『大名縣志』1994 年 4 月，p. 90，『清豐縣志』1990 年 12 月，p. 82），ここも宋代の北流，鄒逸麟氏のいうところの「商胡北流」と「小吳北流」の通り道であり，そのときの堆積物であるかもしれない。

そこで問題は，哀公元年と四年の五鹿である。これもこの漢志河ぞいの沙鹿ないし五鹿なのだろうか。哀公元年には，四月に，齊と衞が邯鄲を救うために，五鹿を圍んだといい，哀公四年には，七月に，齊の陳乞・弦施と衞の寧跪が范氏を救うために五鹿を圍んだという。これらは晉の范氏中行氏の亂の流れのなかのできごとで，反亂側の趙稷らが邯鄲に據り，また同じく荀寅と范吉射が朝歌に據っていて，齊と衞はかれらを助けて晉と戰おうとしている。哀公元年には引き續いて，齊侯と衞侯が乾侯で會合し，魯や鮮虞とともに晉を伐って棘蒲を取ったという。乾侯は禹貢河西岸にあるし，棘蒲については，史記・趙世家で，敬侯六年に，趙が楚から兵を借りて魏を伐ち，棘蒲を取ったという。史記正義は，唐の趙州平棘縣にあてるが，そこはいまの河北省趙縣であって，趙と魏の間で爭うべき場所ではない。史記・傅靳蒯成列傳の靳歙傳に，趙軍を追って安陽を攻め，東に向って棘蒲にいたったという，その棘蒲とすれば，これもだいたい禹貢河沿いの地名だと思って矛盾はない。鉅鹿の戰いで，章邯が陣どった棘原も，そのあたりなのだろう。哀公四年には，十一月に邯鄲が落城し，趙稷は臨に逃げ，弦施はそれを迎えて，そのまま臨の城壁をこわした。臨は河北臨城縣附近とされる。また荀寅は鮮虞に逃げ込み，齊の國夏が鮮虞と合流して，荀寅を柏人に入らせた。柏人および，このとき國夏が占領したとされる邢，任，欒，鄗，逆畤，陰人，盂，壺口の八地は，おそらくほとんどが鉅鹿澤周邊の地名であろう。すばやくこれだけの戰果が上がったのは，鮮虞が協

力したからであろうが，ともかく，このあたりの作戰行動は，みな禹貢河の西で行われているとみられる。すると，漢志河の東の五鹿を圍む意味がわからないのである。なお，八地のなかの「欒」について，杜預は趙國平棘縣西北にあるというが，これもさきの棘蒲と同様に，北に寄り過ぎていると思う。あるいはここが漢の南縣縣で，つまりは沙丘最寄りの地名であったかもしれない。

范氏中行氏の亂は，結局は，東西を禹貢河と太行山に挾まれた地，つまり晉にとっての東陽の地の支配をめぐる爭いであった。晉がここに進出してきたのがいつごろのことなのか，正確にはわからないが，春秋・宣公十五年から十六年にかけて，赤狄潞氏および甲氏を滅ぼしたことがその契機となったことであろう。これによって，いわゆる上黨の地が晉のものとなり，そこから太行山を越えて東陽に出ていく條件がととのった。潞氏との戰いで功績があった荀林父は，宣公十二年の邲の戰いの敗將だが，楚に對する一敗よりも，赤狄を滅ぼして東へ領地を擴大する道を開いたことの方が，高く評價されている。その關係からか，東陽の攻略にあたったのは，荀林父の子孫，中行氏の荀吳で，春秋および左傳の昭公十二年，十三年，十五年に，鮮虞を攻擊した記事が見える。おそらくそのなかで中行氏と鮮虞の間に緣が生まれたのだろう，范氏中行氏の亂においては，鮮虞が反亂側につく。邯鄲落城後に荀寅が鮮虞に逃げ込んだのは，それだけ深い關係にあったということである。荀寅は荀吳の子である。鮮虞の根據地はまさに鉅鹿澤を中心とする地域であり，實戰のうえで重要な役割を擔ったであろう。ただ，このときも，反亂發生後の最初の戰鬪で，反亂軍が潞において敗れたときに（左傳・定公十四年），大勢は決していたのかもしれない。長平の大敗がただちに邯鄲の包圍につながったように，東陽の地は，太行山側から攻め下られると不利なのである。なお，鮮虞はのちに中山國を建てたりもするのだが，沙丘の紂の淫地の餘民とされるひとびとも，じつは鮮虞の遺民であったのかもしれないと思う。

さて，話を五鹿にもどそう。ここで考えうることはふたつある。ひとつには，この五鹿は別の五鹿であって，漢志河の東ではなく，禹貢河の西にあるという考え方で，杜預が晉の邑と言うのは，暗にそれを想定しているのかもしれない。ただ，具體的な位置を言わないのは，どことも見當がつかないのであろう。楊伯峻氏はこれを元城縣東の五鹿，つまり沙鹿にあてて，衞縣西北の五鹿と區別しようとするのだが，杜預が氣にしているのは，そのような小さな差ではなかろう。漢志河の東と禹貢河の西に同じ地名の存在する例は，なくはない。そのむかし，邢が狄に追われて移った先の夷儀は，左傳の閔公二年，僖公元年に見えるのだが，山東聊城附近にあることになっている。ところが，定公九年には，齊が晉の夷儀を伐ったという。これは邢が移る前にいたところ，すなわち河北邢臺だと，通說では言われている。ただ襄公二十四年に齊を伐たんとして諸侯が會し

た夷儀，また襄公二十五年に晉が衞の獻公に與えた夷儀はそのどちらかとなるとむずかしく，通說ですべて一件落着というわけではないことを，あとで述べる。もうひとつの例は頓丘である。漢の頓丘縣は東郡に屬して，漢志河の東にある。いまの淸豐縣の西にあたる。ところが戰國策・燕策二に，蘇代が，宿胥之口を決潰させると，魏には虛と頓丘が無くなる，と言うときの頓丘，また水經注卷九・淇水に竹書紀年を引いて，晉の定公三十一年（魯・哀公十四年）に頓丘に城を築いた，とあるときの頓丘は，漢志河の東では，東に寄りすぎる。もっと西にあることがのぞましい。詩經・衞風・氓に，あなたを送って淇を涉り，頓丘まで行ったのよ，というときの頓丘も，あるいはこれに加えるべきなのかもしれない。水經注には頓丘縣がふたつあって，ひとつは卷五・河水にみえる頓丘郡の頓丘縣で，これが漢の東郡の頓丘縣を承けつぐ（『中國歷史地圖集』第四册，p.51）。頓丘郡が置かれたのは晉のときである。このほかにもうひとつ，卷九・淇水にも別の頓丘縣があって（同，p.47），水經注は，これが燕策や紀年の頓丘だとみなしている。魏書・地形志上によれば，この頓丘縣は司州の黎陽郡に屬す。いまの浚縣の北あたりになり，たしかにこちらが位置的にはふさわしいのだが，この時期以外にそこに頓丘縣を見いだすことはできない。春秋戰國時代の頓丘がそこにあったとして，なぜ北魏になって復活するのだろうか。魏書・地形志の記述によると，太和年間に頓丘郡の頓丘縣が汲郡に移管され，後に黎陽郡に移ったのだが，もとの場所に殘ったものが頓丘郡の頓丘縣として景明年間にまた設置されたようである。すると，汲郡に移管されたときに，むかしの傳承かなにかにもとづいたということなのだろうか。どうもまだわからないことが多い。

もうひとつの考え方は，哀公元年と四年の五鹿も同じ五鹿であるという考えである。主戰場が禹貢河の西にあるときに漢志河の東の五鹿を圍む意味さえ說明できるならば，それがもっとも話が早い。

范氏中行氏の亂と平行して，衞の相續爭いが起こっており，哀公二年に趙鞅は，亡命中の衞の太子蒯聵を戚に送り込む。衞は齊とともに范氏中行氏の側にくみしているので，もちろんそれを牽制するための行動である。杜預は，戚は頓丘衞縣の西にあるといい，水經注卷五・河水によると，黃河の故道つまり漢志河が戚城の西を流れている。漢志河岸にあったことは，左傳の記述からもうかがえ，たとえば哀公十六年では，「河上」と表現されている。五鹿から漢志河に沿ってすこし南にさかのぼったところである。この戚は，史記では「宿」と呼ばれているが，なかなか重要な場所である。文公元年には晉が衞を攻めるときに戚をまず占領している（文公八年に返還）。もともと衞の孫氏の領地であって，孫林父がここを據點にして，ときには衞に叛いて晉に服屬したりもした（成公八年，襄公二十六年）。吳の季札も，衞から晉に行く途中で，ここに一泊しようとしている（襄公二十九年）。つまり，晉からすれば衞に赴く入り口にあるわけで，だから左傳を讀ん

でいると，戚が衞都濮陽の西にあるような印象をいだくが，實際にはほぼま北にあって，わずかに東にふれるくらいである。哀公二年には，齊からも范氏の救援のために食糧を送ろうとしており，鄭軍を輸送役にあたらせたら，戚で趙鞅らと遭遇して，鐵の戰いとなる。齊から朝歌に行くにも，ここを通るのである。要するに黄河を渡るための要衝なのであろう。翌哀公三年には，蒯聵の居すわった戚を，齊と衞が包圍して，中山の應援を仰いでいる。漢志河の東にあるはずの戚のために，禹貢河の西にいるはずの中山を頼むところがおもしろい。ところで，趙鞅が太子蒯聵を戚に送り込むときのこと，目立たないように夜間に行動したのだが，道に迷ってしまい，同道していた陽虎が，黄河を右にして南に行けば着くはずだ，と案内した。ということは，戚の北方で漢志河を渡っているのであり，五鹿から遠くないところにかれらの渡河點があったと思われる。すると，范氏中行氏の救援のために五鹿を圍むのは，渡河點の確保のためなのではなかろうか。そうしておかないと，黄河の西で戰うことはできないのである。それにしても戰場は禹貢河の西にある。漢志河だけを渡ったのではすまないはずである。

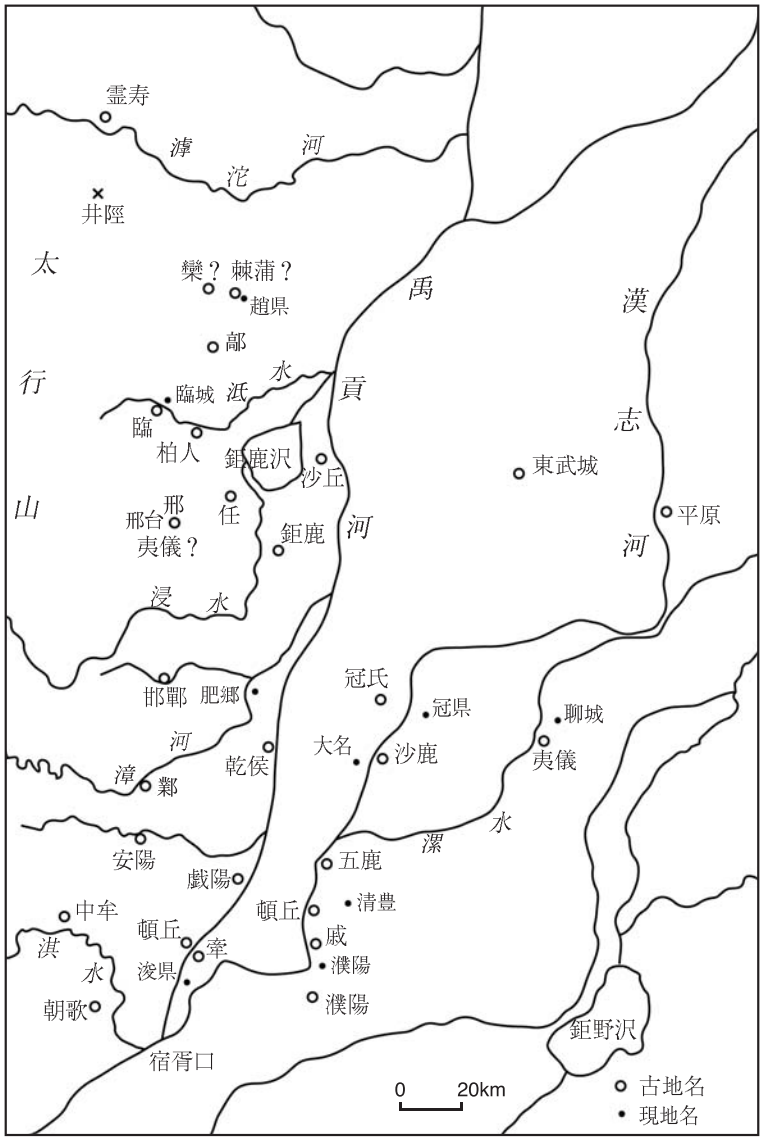
このあたりで漢志河と禹貢河の關係を考えよう。譚其驤氏の研究に從えば，あるときにどちらかからどちらかへ流れが移ったというのではなく，春秋戰國時代を通じてだいたい兩者が竝存していたとみてよいのだろう。おりにふれて，兩者のどちらかが「河」として史料にあらわれる。しかし，左傳などを讀んでいて，ふたすじの流れを意識させるところはない。左傳に登場するひとびとの地理感のなかでは，あくまで「河」はひとつしかないようにみえる。たとえば，晉から歸國できなくなった魯の昭公が，禹貢河西岸の乾侯でなくなるまえに，黄河にかけてあの男季孫意如には會わないと誓うのだが（左傳・昭公三十一年），譚其驤氏が言うように，當時禹貢河が存在していたことの證明になろう。しかし，たしかに眼前にあるのは禹貢河であるが，當時漢志河の流れも存在していたとするならば，禹貢河だけを取り出して誓うのもおかしな話である。黄河にかけて誓うというのは，言外に黄河を渡って歸國することをかけて，つまりはあの男に會うくらいなら歸國しないぞ，という氣持ちであろうが，昭公が歸國するためには禹貢河だけでなく漢志河も渡らなければならない。ここは，禹貢河と漢志河の總體をひとつの黄河と見て誓っていると考えていいだろう。譚其驤氏が强調するように，春秋戰國時代の華北平原には空白地帶が存在する。それはつまり禹貢河と漢志河に挾まれた地域には，ほとんどその時代の地名が存在しないという事實にあらわれる。禹貢河と漢志河の間になにもないのであれば，事實上ひとつの黄河とみなしてもさしつかえないだろう。禹貢河と漢志河の兩存するところで黄河を渡る場合には，兩河を渡ってはじめて渡ったことになる。たとえば，趙鞅と蒯聵が戚に行くときには，禹貢河の西から漢志河の東まで渡り切って，やっと南に向かうことができたはずで，夜間に道を見失ったのも無理はなかっ

たろう。漢志河の東のことならわかりますよ，とでも言いたげな陽虎の口ぶりが，おもしろい。

どこで黄河を渡るのかだが，まず，戚から漢志河を渡ってそのまま西へすすむと，牽という場所に出る。牽は例外的に禹貢河の東にあるが，この牽の西の古河道は，譚其驤説によれば禹貢河だが，史念海説によれば淇水である。定公十四年に，魯と齊と衞の三諸侯が，この牽で會合している。左傳によれば，朝歌で包圍された范氏を救う相談のための會合であったようで，牽からさらに西に進むと，朝歌にいたる。また，牽に近いところに，さきほどの頓丘のうち，西にある方の頓丘がある。牽と頓丘の位置については，史念海氏の「河南浚縣大伾山西部古河道考」が詳しい（『河山集五集』，1991 年 12 月，山西人民出版社，pp. 146–148，pp. 152–155）。もし東西にふたつの頓丘があるのだとすると，あるいは渡河點の東西にあるからなのかもしれない。東の頓丘は，戚のやや北，五鹿のやや南にあたる。

さらにこれより北に，つまり下流に，進んで，漢志河の東と禹貢河の西に對應する地點を探してみよう。まず，漢志河の東の五鹿のうち，杜預の二説の南の方，つまり沙鹿でない方の五鹿から西を望むと，禹貢河の西に戲陽という地名がある。左傳・昭公九年に，晉の荀盈が，齊からの歸途に戲陽でなくなっている。杜預の注によると魏郡內黃縣の北に戲陽城があり，水經注卷九・淇水によると白溝が內黃縣の北で戲陽城の東を通るという。荀盈はここで黄河を渡ったのであろう。あるいはそれが體にこたえたのかもしれない。つぎにすこし北に進んで，漢志河の東の，杜預の二説の北の方の五鹿，つまり沙鹿から西を望むと，禹貢河の西にあるのが，魯の昭公が歸國を待ちわびた乾侯であり，哀公元年には，齊侯と衞侯がここで會している。南北どちらの五鹿であれ，黄河を渡る，つまり漢志河と禹貢河を渡るための要地であり，ここを押さえることが，齊や衞にとって，禹貢河の西に進出する軍事行動の，第一歩であったことは想像できる。

わざわざ包圍しているのだから，五鹿は無人の沙丘ではない。そこを根據地とする集團がいたものと思われる。かれらはおそらく，食べ物を求めるとこれでも食らえと土くれをよこすような野人の後裔たちで，その因緣で晉と從屬關係があるというのが，文公重耳放浪傳説の主張なのだろう。しかし，それはつまりは實力で關係を維持しているのではないことのあらわれで，野人の後裔たちにとっては，まあ義理があるというぐらいのことであったかもしれない。もちろん，だからといって齊や衞の味方をする義理もないから，齊や衞としてはこれを包圍するしかない。これも想像だが，五鹿の住民はもちろん漢志河と禹貢河の存在を知らないわけがなく，兩河の間に挾まれた土地のなかで行動するすべも，熟知していたのではないだろうか。だから，單に漢志河側の渡河點を押さえるという意味だけの包圍ではなく，同時に禹貢河側についてもなんらかの手配を要



圖二

したのだろう。それを思わせるのは，哀公三年に齊と衞が戚を包圍したときに中山の應援を頼んでいることで，ずいぶん遠くから援軍を呼んでいるように思えるが，戚の包圍も，漢志河側で完結するものではなく，西側からの軍事行動が必要だったのだろう。しかもそれが中山すなわち鮮虞の應援であったことには意味があって，かれらが，ほかの諸侯の正規軍とはちがって，禹貢河と漢志河の間でも自由に動けたというのではあるまいか。ともかく，このように考えると，哀公元年と四年の五鹿も，それまでの五鹿と區

別する必要はなく，漢志河の東の五鹿であったとみてよいのだろう。襄公二十五年に，齊の崔杼が衞の獻公の家族とひきかえに五鹿を要求したのは，崔杼が五鹿のそのような意義をよくわかっていたということなのだろう。

渡河點を探してさらに北に進むと，冠氏という地名がある。左傳・哀公十五年に，昔話のなかで，齊が衞のために晉の冠氏を伐ったといい，これに相當するのは，定公九年のことだと杜預は言い，そこでは晉の夷儀を伐ったことになっている。冠氏について杜預は，陽平館陶縣にあてる。これも例外的に漢志河の西にあたるのだが，それでよいのかどうか，もとより夷儀についても考えてみなければならない。さきにもふれたように，通說では夷儀にはふたつあって，ひとつは山東聊城附近，ひとつは河北邢臺附近だということになっている。東西に遠く離れているが，僖公元年に邢が狄に追われて移った先（聊城）と，もといたところ（邢臺）だという理解である。このときの邢は當然，黃河を，それも禹貢河と漢志河を，まとめて渡らなければならなかったはずである。禹貢河と漢志河の間には安住の地は存在しないのであろう。ただともかく，そこに渡河の可能な地點があったことは推測される。だいたい見積もってみるに，いまの河北省肥鄉縣から山東省冠縣へ拔けるあたりだと思われる。冠氏が杜預のいう陽平館陶縣であれば，だいたいその線上にある。定公九年に齊が伐ったという晉の夷儀は，ことさらに晉の夷儀というからには，聊城の夷儀とは區別があるのだろうが，みながそう考えるようにこれが邢臺の夷儀であるのかというと，それは疑問である。このとき齊の友軍の衞は，邯鄲の近くの五氏あるいは寒氏をめざして，中牟を通過したが，中牟にいた晉軍は衞軍を避けて，齊軍を攻擊し，これを破ったという。齊軍が衞軍に先んじて，遠く邢臺まで進んでいたのでは，話が合わない。襄公二十四年には，晉が齊を伐たんとして諸侯を夷儀に會している。前年に齊が晉を攻めたことに對する報復だが，楊伯峻氏は，これを邢臺の夷儀とみなす（『春秋左傳注』，p. 1091）。しかし，これから齊を攻めるというのに，邢臺では西北に引っ込み過ぎる。翌年の襄公二十五年には，晉が衞の獻公を亡命先の齊から迎え，獻公は夷儀に身を落ちつける。楊伯峻氏は，これは聊城の夷儀だという（『春秋左傳注』，p. 1102）。しかし聊城では濮陽から東に離れ過ぎる。蒯聵が送り込まれた先の戚と比べてみればよい。もしかりに，夷儀が渡河點の兩岸あたりを指しているとすると，どちらにしてもたいへん納得がいきやすく，また，哀公十五年に地名を冠氏に置きかえているのとも合致するのであるが，ただその確證がない。なお，この渡河點からそのまま西に進むと，邢臺というより邯鄲にいたることには，注意すべきであろう。

さらにずっと北に進んだところに，もうひとつ黃河を渡ることのできる場所がある。それが，始皇帝が最後に利用した平原津である。平原は漢志河の東にあって，そこで渡ることができるのは漢志河だけであるが，ここも本來は禹貢河まで渡らなければ意味を

なさないのであろう。實際，始皇帝もそうしたのである。だが，このあたりになると，禹貢河と漢志河の間の距離がかなり廣がって，まとめてひと渡りというわけにはいくまい。ちょうど中間點あたりに，東武城という，戰國時代に存在した地名があり，そこでひと休みできそうにみえる。つまり，總體的な意味での平原の渡河を成立させているのは，この東武城の存在なのだと思われる。史記の平原君列傳によれば，東武城は，趙の平原君趙勝の封ぜられたところである。意外にも平原君は平原に封ぜられたことはない。東武城を領有することはすなわち平原の渡しを掌握することであり，だから，多少は誇大廣告氣味に，平原君と呼ばれたのであろう。そして始皇帝の行程をみれば，このルートによって禹貢河を渡ったところにあるのが，ほかならぬ沙丘なのである。だから沙丘は，單なる遊興の地にとどまるのではなく，平原の渡河ルートの西端という，交通の要地としての意義もある。趙からすれば，沙丘を起點にして黃河を渡るために開發したのが，東武城を經て平原をめざす道だったのであろう。始皇帝のなきがらのその後の行程をたどれば，沙丘からさらに井陘を拔けて朔方の地まで，道はつながっていることもわかる。

だから，渡河の要地近くにあって，自然の高みをなしているという點で，漢志河の東の沙鹿や五鹿と，禹貢河の西の沙丘や鉅鹿は，似たような環境にあるのである。五鹿の出てくる史料がもうひとつあって，汲冢書のなかの「周穆王美人盛姬死事」である。いま穆天子傳の卷六に收まる。冒頭が缺けていてよくわからないが，現存するところは，周の穆王が五鹿で狩りをしているところから始まる。白い鹿が一頭捕まって，それで五鹿の名がついたらしいのだが，漯水という河川の名が見えるので，例の漢志河の東の五鹿だと思われる。水經注卷五の五鹿のところでも，これを引く。ただ，穆王が五鹿周邊でしていることは，狩獵と飲酒と音樂とで，どうも沙丘で趙の武靈王がやっていそうなことである。穆天子傳の穆王が井陘を拔けて朔方經由で西王母のもとをめざすのは，趙王のとるべき路線である。すると，盛姬死事の五鹿における周の穆王は，じつは沙丘や鉅鹿における趙の武靈王をイメージしているのかもしれない。盛姬にあたるのはだれかというと，武靈王となれば，史記・趙世家に見えるところの，王が夢に見た美人の吳娃孟姚であろうか。惠文王の母で，武靈王が位を惠文王に讓る二年前になくなっている。

さて，話を始皇帝にもどそう。沙丘が渡河行程のうえで必ず通るべき場所であるとなると，始皇が死ぬまぎわに沙丘に至ったのは，單に通りかかっただけだと言えなくもない。しかしそうかたづけてしまうには，沙丘は，あまりにもただならぬところなのである。始皇のなきがらは，沙丘から井陘を拔け，朔方を回って咸陽に歸ったのだが，そもそもそれが本來の豫定だったのだろうか。李零氏は，趙高たちが人目を避けるために北

路をとったのであって，もともとは沙丘から邯鄲に出て上黨を經由して歸るつもりだったのだろうと推測する（「西伯戡黎的再認識－讀清華楚簡《耆夜》篇」，陳致主編『簡帛・經典・古史』，2013年8月，上海古籍出版社，p.125，注(2)）。たしかに一理ある。しかしそうなると，平原から沙丘へ行くところがすでに遠回りである。やはり始皇は，沙丘という特別な場所に，なんらかの目的をもって向かったのではないだろうか。ただ，その目的がなんであったか，いまとなってはだれにもわからない。われわれにできることは，こういうこともあったかと，想像力をはたらかせてみることのみである。

そのとき，どうしても見のがすことのできないことがひとつある。これもよく知られていることだが，始皇帝の母親，つまりのちの太后になった女性は，もとは邯鄲の美しい踊り子であった。史記・呂不韋列傳によれば邯鄲の豪家の娘ということになっているが，かの女の行狀からして，だいたい育ちは知れるというもの。史記・貨殖列傳に記述される風俗からみて，邯鄲の花柳界の人材供給源のひとつが，沙丘のあの酒池肉林の民にあったとしてもふしぎはないだろう。だから，始皇帝の母親の若いころの知り合いにもそういうひとびとがいて，沙丘のあれやこれやは身近な話題であったかもしれず，するとその息子にとっても遠い別世界のことではなかったであろう。もし小說家として創作が許されるならば，遠慮はいらない。太后そのひとの家系に，沙丘の民の血が流れていたなどということも，あっておかしくはない。それはつまり始皇自身にもつながるわけである。かれにとってそれは忌むべき血筋でしかなかったろうが，みずからの死期を察した始皇帝は，最後の地に，なき母の故里を選んだのである，というすじがきは，小說のプロットとして捨てがたいように思われる。ただ，わたしにそれを一篇の作品にしたてる文才のないことが恨めしい。

補　　記

原稿提出後に氣づいたのだが，北京大學藏西漢竹書の趙正書では，始皇帝の死んだ場所は沙丘ではなく，「白人」つまり柏人で病に倒れたとある。柏人は，范氏中行氏の亂で，荀寅が最後に逃げ込んだところである。沙丘からすると，鉅鹿澤をはさんでその西にある。趙正書にも說話的な要素が見られて，これをそのまま史實と信ずることはできないが，沙丘平臺說もまた確實な根據をもつものではなかったのだろう。あるいは始皇帝がどこで死んだのか，正確なところは趙高たちの胸のうちにおさめられて，鉅鹿澤周邊であるという以上のことはだれも知らなかったというのが眞相なのかもしれない。そこでお話の舞臺としてもっともふさわしいのはどこかといえば，あの沙丘であった，ということなのだろうか。